

平成22年の新春 明けましておめでとうございます



西栗倉村長
道上 正寿

厳しい経済環境が続いている今、繰り返し地域社会の在り方が議論できれば幸いです。昔ながらの正月の風景「一家団欒」でゆっくり「一時」を楽しみたいものです。

昨年は大きな出来事が2件ありました。1件は8月9日の佐用町と美作市を襲った集中豪雨です。山の背を越えただけの近隣市町村のあれだけの災害、翌日に見舞いに訪れた現地の悲惨な状況とボランティア活動に参加した体験を決して忘れてはならないと感じています。「災害は忘れた

頃にやってくる」とよく言われますが、まず住民自身が災害に対する危機意識を持ち続けること、次に地域の今までの災害の特性を整理して緊急時の行動計画を冷静に判断できること、地域住民の連携、

情報共有を繰り返すこと、行政情報との緊密な連携を模索して災害に対応できることが、自分自身の安全にとって有意義です。行政では常備、非常備の可能な対応と準備を怠りなく繰り返すことが使命です。

次に、衆議院選挙で「政権交代」が起きたことです。戦後初めての大きな政変で、国民はもとより我々地方行政を預かる者にとっても、期待と不安が一杯で新しい年を迎えたことでしょう。国にとって健全で切磋琢磨できる「二大政党」への移行は、国民にとって意義があると確信します。

ただ、政権交代が起きて3ヶ月が経過して、事業仕分けのようにマスコミと住民を巻き込んだ新たな視点と「与党にならない民主党と野党にならない自民党」では、健全で厳しい議論が生まれたいのではと心配しています。

さて「政権交代」が起きたことは、我々自身の選択の結果で、マニフェストの健全な実行も含めてこれからの民主党をしつかり厳しい視点で応援していきます。政権交代での政策の違いについて、心配な案件がいくらか存在します。まず、市町村合併の課題です。

平成の大合併は、約3200の市町村が1800市町村に集約されました。合併後5年が経過して、さらに推進する意見と検証する意見に分かれています。新政権では、合併の推進から自主的な合併に変わり、道州制についてもぜひぶんと時間を要する雰囲気です。さらに、地方分権から地域主権に言葉が変わって強く

分権が推進される様子ですが、将来に渡っての国の在り方、国と市町村の役割等が不明瞭では期待外れに終わるのではと心配しています。また、財政の問題は極めて深刻です。バブルがはじけて20年近くが経過して、昨年のアメリカ発のリーマンショック以来、景

気回復の兆しが見えずに22年度の税収は40兆円を割り込む予測で、歳出は90兆円を超え、単年度で50兆円の不足になる見込みです。長期に渡って財源の伴うこども手当、農家所得保障、また削減では暫定税率の廃止と環境税の創出など歳入と歳出、政策と財源の問題が長期の視点で論じられていないことが不安です。総務省案で交付税の増額が言われていますが、長期的な視点を見いだすことが難しいのではと強く感じています。

21世紀の課題は「成長から成熟社会」を我々自身がしっかり認め、新たな「物への欲求」から教育や旅といった「心

の充実」に視点を置くことが大切で、環境・健康・安全がキーワードになります。「百年の森林づくり」への取り組みも「環境」がポイントになり、

「先達が汗をかき苦勞した山林」を次の世代へ、「先達の夢」を次の世代へが基本的な考えです。百年という将来の夢に向かって、今できること、

今すべきことを住民の参加をいただきながら確実に実行していく決心です。最後にになりましたが、22年度が住民の皆様お一人おひと

りにとって明るく元気な年になりますよう御祈念申しあげまして新年のごあいさつとさせていただきます。



西粟倉村議会議長
青木 秀樹

明けましておめでとうございませう。本年が穏やかな年になりますよう、心からご祈念申し上げます。

画は樹を植えて育てるような時間と成長の尺で捉え、そして百年の計画は、「子を教える」、子に教え伝えることを前提に考慮しなければならぬ、というほどの意味だと思います。

このうち、十年の計までは自分の人生の範囲で、計画を見て修正ややり直しが可能です。しかし、百年の計とは、

ほぼ間違いなく自分では結果を見ることのない計画です。自分がそこに生きていっているいは別として、次の世代にも通用する普遍的に価値の変わらないものでなければならぬ

一日の計は朝にあり
一年の計は元旦にあり
十年の計は樹を植えるにあり
百年の計は子を教えるにあり
と云うのだそうです。

一日の計画を朝考えるように、一年の計画は元旦に立てるのが大切であり、十年の計

「どうでもいいことは伝わり

やすいが、肝心なことはなかなか伝えるのが難しい。年齢を重ね、世の変遷を経験して、人生これが大事と悟ったよう

速に縮んでいきます。昔とは比べようもなく便利で快適になりました。ただ、もうそろそろ「お金」という一つの価値

と田舎で調和の取れた暮らしに重点を置く未来図が必要で

そんな中で、私たちは「百年の森林づくり」に取り組むことを決めました。村制百二十周年を迎えた西粟倉村で、次の百年にいかに取り組むか。山森、源流、あるいは「ふるさと」という位置づけの中で、この村が果たしてきた真の役割と普遍的な価値とは何か。

そして、後世に何を伝え、遺すのか。村の将来を計画する時、この答えを見つけるのは、

今を生きる私たちの必然的な課題です。日々の様々な課題は、喫緊に解決しなければなりません。同時に、未来に想いを馳せながら、はるか遠くの先人や先輩諸氏の力添えをいただきながら、その「教え」を訪ねるべき時が来ているように思います。